

シンポジウムの趣旨と展開

山崎 憲治

「21世紀は災害の世紀」という言葉が現実の生活の中で実感されつつあります。毎年、日本各地で激甚災害が起きています。被災地と被災地、私と被災をつなぐことで、減災と復興を進める回路が創られるはずですが、しかし、オリンピックの華々しい宣伝の中で、復興オリンピックと謳いながら3.11が後ろに追いやられている感を持ってしまうことは残念なことです。

復興が喫緊の課題から後回しされ、苦しい課題から華のある話題に焦点を移しては、歴史を無視することになります。なぜ、災害の頻度が高まっているのか。たしかに地球規模の環境変化に、我々の生活・生産が影響を及ぼしていることは確かでしょう。一方で、変化に対応できない社会、あるいは格差が益々広がる社会のなかで、被災者にかかる圧力は増しています。災害は社会を映す鏡です。社会が直面する課題がそこに反映されています。

災害から学ぶことは多々あります。今、本格的な復興が問われています。地域の復興に汗を流した方々が、その地域に一層の地域愛を持つとともに、生きがいを得ている姿にだれもが共感を持っています。ここに被災地に学ぶことの第一の課題があるように思えます。

災害文化研究会は研究者だけの組織ではありません。ジャーナリスト、教育実践者、NPOの組織者、さらに市民にも参加を呼びかけています。草の根の組織として、現場から課題を捉え、グローバルな視点で課題の解決を図ろうとするものです。本年の大会シンポジウムでは、“つながり”に焦点をあて、論議を深めようと企画しました。

全体講演の北原先生の提起にも関わっていますが、“つながり”は、死者とのつながり、過去と

未来をつなぐもの、生と生、さらに生産の現場間や消費とのつながりなど、具体的課題もあげることがもできます。一方、文学では多様で自由な展開を知ることがもできます。“つながり”に焦点をあてることで、復興の内実を問うことができます。今回、三名のシンポジストに日頃の活動に基づいたご報告、問題提起を行って頂こうと思います。

最初の登壇者は熊坂義裕氏（(社)社会的包摂サポートセンター代表理事）です。命の電話によるつながりを論じてくれます。あげていただいたタイトルは「新しいかたちの支援をつくる—風いだ水面の下にあったもの」です。文字通り、「ぎりぎりの瀬戸際」で緊張ある活動をされている方からの問題提起です。

二番目の登壇者は、阿部重樹氏（東北学院大学地域共生推進機構長、同大学学長室長、同大学経済学部共生社会経済学科教授）です。タイトルは「東北学院大学の『連続講座 震災と文学』について」です。東北学院大学では3.11後、「震災と文学」という名前の連続講座を続けており、この講座を充実させ、報告する本も出版されています。

三番目は石井秀樹氏（福島大学 食農学類、准教授）です。農業における生産者とのつながりに焦点をあてた報告です。タイトルは「福島の復興農学の経験から—“生きる事”の根底にある“耕す営み”」です。

これらの報告の後、指定討論をお二人の方にお願いしました。一人は堀信行氏（都立大学名誉教授）、もう一方は村井康典氏（岩手日報元論説委員）です。お二人には三名の問題提起を一層明確にし、課題のつながりを論じてもらおうと考えました。司会は山崎憲治（元岩手大学教授）が務めます。